

カンジダ血症における微生物検査室からの積極的な情報提供による感染症診療への貢献

◎大友 志伸¹⁾、前田 和樹¹⁾、江後 京子¹⁾、橘 匡廣¹⁾、宮本 和幸¹⁾、林 智弘¹⁾、山下 穂乃佳¹⁾、西川 昌伸¹⁾
パナソニック健康保険組合 松下記念病院¹⁾

【背景と目的】カンジダ血症は早期に適切な治療が必要であり、ACTIONs バンドルの実践は予後改善に効果があるとされている。2015 年から当院の微生物検査室は、結果報告とともに治療に関する情報提供も積極的に行ってきた。さらに 2023 年以降、2 回の眼内炎検索実施と FilmArray (ビオメリュー) 活用による早期の抗真菌薬提案に取り組んできた。そこで、今回はその効果について評価した。

【対象と方法】2010 年から 2014 年 (従来群) と 2017 年から 2021 年 (現状群) におけるカンジダ血症 29 例と 22 例を対象とした。これらについて、カテーテルの抜去、血液培養再検と陰性化後 14 日間の抗真菌薬投与、眼内炎検索の有無を比較した。また、2023 年のカンジダ血症 4 例を対象に眼内炎検索の 2 回実施率と FilmArray を用いた抗真菌薬の提案について検証した。

【結果】従来群と現状群でカテーテル関連菌血症例は、それぞれ 20 例と 16 例であり、そのうちカテーテル抜去がなされたものは 19 例 (95%) と 14 例 (88%) であった ($p=0.418$)。抗真菌薬投与後に血液培養の再検査が実施され

た例は、それぞれ 29 例中 17 例 (59%) と 22 例中 20 例 (91%) であり ($p=0.010$)、そのうち陰性化確認後 14 日間の抗真菌薬が投与されたのは 9 例 (53%) と 18 例 (90%) であった ($p=0.011$)。眼内炎の検索は、それぞれ 11 例 (38%) と 21 例 (96%) で実施された ($p<0.001$)。2 回の眼内炎検索実施例は、それぞれ 11 例中 6 例 (56%)、21 例中 10 例 (48%) と低い割合であった。2023 年の 4 例について眼内炎検索は全て 2 回であった。また FilmArray 活用による有効な抗真菌薬の提案も実施できていた。

【考察】当検査室の取り組みによって当院のカンジダ血症に対するマネジメントは大きく改善した。一方で、眼内炎の検索が 1 回のみの方が多く、当院の課題であった。2023 年以降、当検査室は AST と連携し、主治医に 2 回の眼内炎検索を積極的に働きかけ、改善が認められた。FilmArray 活用による早期の適正な抗真菌薬提案は診療への更なる貢献に繋がり、今後の治療効果向上が期待できる。

【結論】微生物検査室から臨床医への積極的な情報提供は感染症診療に大きく貢献する。 連絡先 06-6992-1231